

公益財団法人日本バスケットボール協会

2022 年度 7-6 月期事業報告

🏀 事業の概況

2022 年度 7-6 月期は、当協会（以下「JBA」）にとって、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、政府方針やガイドラインの見直しを通し、徐々にコロナ禍以前のバスケットボール活動・事業を取り戻した 1 年であった。また、東京オリンピック、自国開催のワールドカップ、そしてパリオリンピックという大きな流れの中で、日本代表「AKATSUKI JAPAN」のブランディングやバスケットボールへの関心、ワールドカップに向けた機運醸成等、バスケットボールファミリーが一丸となり、「ALL バスケ体制」で推進した 1 年でもあった。

1. 2022 年度 7-6 月期の重点実施事項（「2022 年度 7-6 月期事業方針」より）

- 2023 年 FIBA ワールドカップ、2024 年パリ五輪（男女 5 人制・男女 3 人制）に向け、強化体制を構築する
- 都道府県バスケットボール協会、トップリーグ、各種連盟等との連携を強化し、刻々と変化する状況に臨機応変に対応しながら事業を遂行するとともに、バスケットボール価値向上に努める
- 新型コロナウイルス感染症対策を講じ、関わる方々の安全・安心を確保した上で、日本代表戦やウインターカップをはじめとする JBA 主管大会を開催し、バスケットボールの価値向上に努める
- 「JBS2021」の実現に向け、最適な組織体制を構築、より効率的・効果的な組織運営を行う
- 暴力暴言等根絶の実現に向け、ALL バスケ体制で各種施策を推進する
- JBA 未登録競技者層（ファーストスポーツ含む）へのアプローチに向けた施策の検討実施を行う
- 競技者に加え、審判/指導者、TO 等の登録を推進することで、バスケットボールの質を向上させ、バスケットボールファミリーの拡大を図る
- リーグ戦文化の醸成等、選手育成や競技環境の充実に向けた各種事業の実施・制度設計を行う
- 2023 年 FIBA ワールドカップに向け、ステークホルダーとの連携を強化し、準備を進める

2. 重点施策の実施概況

(1) 自国開催ワールドカップに向けた開催準備と機運醸成

2023 年 8 月末に開幕する「FIBA バスケットボールワールドカップ 2023（FBWC2023）」に向けて、日本組織委員会を中心に、FIBA（国際バスケットボール連盟）や開催地行政、ライツホルダーとも連携し、準備を本格化させた。また、日本代表のニックネームを「AKATSUKI FIVE」から「AKATSUKI JAPAN」に変更してリブランディングを行い、露出の強化、商品化の見直し、代表戦の集客施策等、日本代表の認知度・価値向上による機運醸成に努めた。

(2) 運動部活動の地域移行への対応、B リーグ将来構想との連携

運動部活動の地域移行への対応として、特別委員会「運動部活動地域移行検討委員会」を設置し、今後の進め方や JBA としての方針を検討し、その協議内容をブロック別連絡会等で各都道府県協会を始めとする関係者と共有した。また、B リーグの将来構想、更には男子日本代表強化の観点から、「男子日本代表強化検討委員会」を設置し、男子日本代表の活動日程や新リーグのレギュレーション等を協議する場を設けた。

(3) 普及・登録推進に向けた活動

現行の登録制度や D-Fund 制度の見直し、JBA パートナーとの ICT^{※1} ツールの活用等による、新規登録者数増加、登録継続、離脱防止への対応等を協議・検討し、「JBS2021」に掲げた目標達成に向けた取り組みを行った。

※1：Information and Communication Technology（情報通信技術）

🏀 活動報告（概況）

I 日本代表関連

1. 男子日本代表活動概況

トム・ホーバス体制へ移行し約 1 年が経過、監督就任後より着手したスピードバスケットボール、ファイブアウト、3P を中心とする戦術を継続し、それに合う選手選考・強化合宿を重ねた。新体制移行直後は負け越していたワールドカップ予選 Window も最終的には 7 勝 5 敗で勝ち越し、自力で FBWC2023 への出場権を獲得した。ホーバス監督は、日本代表文化の変革にも着手しており、時間の経過と共に徐々に浸透しつつある。2023 年 8 月には日本を含めた 3 か国の共同開催となる FBWC2023 が沖縄で開幕、同大会にてアジア大陸 1 位を達成できればパリオリンピックの出場権を獲得することができるため、引き続き FBWC2023、パリオリンピック出場に向けた強化活動を継続していく。

U22 代表については、2023 年 8 月に延期となった FISU ワールドユニバーシティゲームズに向け、NBA グローバルアカデミー、オーストラリア協会の協力を受けてオーストラリア遠征を実施し、国際試合の実戦の機会を設けた。

アンダーカテゴリー代表については、2022 年 8 月の U18 アジア選手権にて 2 位となり、U19 ワールドカップへの出場権を獲得、2023 年 6 月に開催された U19 ワールドカップでは過去最高成績となる 8 位で大会を終えた。川島悠翔（福大大濠高）、ジェイコブス晶（ハワイ大）等 A 代表候補に選出される選手も出てきており、一気に通貫の強化を強調する機会となった。また、U17 代表も U17 ワールドカップに出場、16 チーム中 14 位で大会を終えた。初めて世界レベルに挑戦する年代でもあるため世界との差を痛感する大会となったが、後に U19 ワールドカップのメンバーに U17 代表から 4 名が引き上げられるなど、アンダーカテゴリー代表として一気に通貫の強化を推進する流れとなっている。

2. 女子日本代表活動概況

女子日本代表は、2022 年 9 月開催の女子ワールドカップ 2022 での優勝、および優勝チームに与えられるパリオリンピック出場権獲得を目指して 4 月から強化活動を継続。東京オリンピック（5 人制）代表、3x3 代表の選手らにベテラン・若手有望選手を加えたメンバーに絞り込まれ、約 5 か月に亘る充実した強化活動を経て迎えた女子ワールドカップでは、初戦のマリ戦に快勝した後、2 戦目でセルビアに競り負けると、続くカナダ戦・フランス戦でも悪い流れを断つことができず敗戦。優勝を目指していたが予選ラウンド敗退、最終成績 9 位で大会を終えた。その後、2023 年 6 月開催のアジアカップ 2023 での 6 連覇、2024 年 2 月開催の OQT（オリンピック世界最終予選）でのパリオリンピック出場権獲得を目指し、2023 年シーズンの活動を開始。約 1 か月半での新たなチーム作りとなったが、カナダ遠征・国際強化試合を経て臨んだアジアカップでは、6 連覇のかかった中国との決勝で接戦の末惜しくも敗退し、2013 年から続いた大会連覇は 5 で途切れ、準優勝となった。

女子ユニバ代表は、2023 年 7 月に再延期された FISU ワールドユニバーシティゲームズに向け、前年に続き改めて代表チームを編成。新たに柏倉秀徳氏をヘッドコーチとし選手選考と強化活動を開始した。活動序盤ではコロナ感染の影響により候補選手が揃わない事態が発生し、海外遠征の実施は叶わなかったが、U19 との練習試合、WJBL との共催イベントで実戦強化を重ね、大会に向けての強化を進めた。

女子 U19 代表は、2023 年 7 月の U19 女子ワールドカップ 2023 に向け、U18 アジア選手権メンバーを中心に候補選手を追加。WJBL との共催イベントやユニバ代表との練習試合、また、来日したチェコ U19 代表との対戦等を経て日本代表選手の選考と強化活動を進めた。

女子 U18 代表は、2022 年 9 月にインド・バンガロールで開催された女子 U18 アジア選手権 2022 に出場。この世代はコロナ禍による国際大会の機会損失等の影響を大きく受けており、序盤はなかなか勢いに乗ることができないながらも予選を勝ち進んだが、準決勝の中国戦で接戦の末敗退、3 位で大会を終え、U19 ワールドカップの出場権を獲得した。

女子 U17 代表は、U16 女子アジア選手権が 1 年延期され 2022 年 6 月に開催されたことに伴い、U16 アジア選手権終了後、9 日後に U17 女子ワールドカップ 2022 が開幕するという超変則日程となり、事前合宿および 2 大会通算 32 日間の長期にわたり代表招集・拘束されることとなった。長期拘束による学業への負担・ウクライナ情勢の関係もあり、約半数の選手が U16 アジア選手権のみの参加となったため、同大会終了後、わずかな帰国の間に選手を 6 名入れ替えて U17 ワールドカップに臨み、予選グループ A3 位通過となったが、Round of 16 でグループ B2 位通過のスロベニアを下してベスト 8 入り、最終成績は 8 位で大会を終えた。

女子 U16 日本代表は、2023 年 7 月に開催される U16 女子アジア選手権 2023 に向けてエントリーキャンプおよび第 1 次、第 2 次強化合宿を行い、選手選考と基本となる戦術やディフェンスルールの練習を行った。

3. 男子 3x3 日本代表活動概況

3x3 の男子 A 代表は、アジアカップ 2022・アジアカップ 2023 の結果を経て、パリオリンピック出場権獲得に向けての強化策の一環として、新たに帰化選手：トーマス・ケネディ（茨城ロボッツ）を招聘し、2023 年 6 月開催の世界選手権 2023 に臨んだ。結果として課題であったリバウンドやインサイドのディフェンスの改善が見られ、世界選手権では初の予選プール突破を果たした。

U23 代表は、2022 年 7 月開催のネーションズリーグ 2022 アジアを勝ち抜き、同年 9 月開催のネーションズファイナル 2022 に出場。惜しくも準々決勝で敗れ、5 位で大会を終えた。その後、2022 年 10 月開催の U23 世界選手権 2022 では、準々決勝にて強豪セルビアと接戦を演じるも惜敗、6 位で大会を終えた。また、2023 年 6 月開催のネーションズリーグ 2023 アジア・オセアニアでは、中国・モンゴル・ニュージーランド等のアジア強豪国との連日の試合の中、2 大会連続のツアー総合優勝を果たし、ネーションズリーグファイナル 2023（2023 年 9 月開催予定）への切符を手にした。

U21 代表は、2022 年 7 月のネーションズリーグ 2022 アジア、2023 年 6 月のネーションズリーグ 2023 アジア・パシフィックと、2 大会連続でツアー総合 2 位という結果を残した。今後、その先の U23 代表・A 代表カテゴリーでの活躍が期待される。

U17 代表は、U17 アジアカップ 2022 にて優勝を果たし、2023 年 8 月開催予定の U18 世界選手権 2023 の出場権を獲得した。

4. 女子 3x3 日本代表活動概況

3x3 の女子 A 代表は、世界・アジアの成長スピードが加速する中、2022 年 7 月のアジアカップ 2022、2023 年 3 月のアジアカップ 2023 では満足のいく結果を残すことができなかった。世界選手権 2023 やウィメンズシリーズに向けての強化・選手選考のため、2023 年 4～5 月にかけて国内強化合宿を行い、世界選手権直前にはオーストリアにて強化合宿を実施し、強化活動を推し進めた。その結果、2023 年 5 月開催の世界選手権 2023 では 3 勝 1 敗で予選プールを突破。プレーイン（準々決勝進出決定戦）では、優勝したアメリカに敗れはしたものの、今後につながる大会となった。また、2023 年 5 月（中国・武漢）、6 月（中国・保定）に出場したウィメンズシリーズでは、世界レベルにトライを続けながら、継続的な強化と FIBA ポイントの獲得を進めている。

U23 代表は、2022 年 7 月開催のネーションズリーグ 2022 での経験をもとに、2022 年 10 月開催の U23 世界選手権 2022 では 5 位の成績を収めた。

U21 代表は、2022 年 7 月開催のネーションズリーグ 2022 アジアでツアー総合優勝を果たし、2022 年 9 月開催のネーションズリーグファイナルに出場した。同大会は U23 対象大会のため、ほとんどが格上の相手であったが、予選プールを突破して 7 位で大会を終えることができた。

U18 代表は、2022 年 8 月開催の U18 世界選手権 2022 に出場し、予選プールを突破して最終順位は 5 位。また、2022 年 10 月開催の U17 アジアカップで優勝し、U18 世界選手権 2023（2023 年 8 月開催予定）の出場権を獲得した。

II 国際

1. 国際関連活動概況

当期はコロナ禍の規制等も緩和され、2022 年 7 月に開催された FBWC2023 予選 Window3 およびアジアカップ 2022 を皮切りに、国際試合が多く開催された。同年 8 月には宮城県仙台市に女子ラトビア代表チーム、神奈川県厚木市に男子ニュージーランド代表チームを招聘し、強化試合を実施。2023 年 6 月には群馬県高崎市に女子デンマーク代表チーム

を招聘し、女子アジアカップに向けた強化試合を実施した。特に女子日本代表については世界トップクラスのチームに成長しており、対等に戦える国に限られるため、対戦国の選定が厳しくなっているのが現状。

また、国際ネットワークを生かし、U22 男子オーストラリア遠征、女子代表カナダ遠征の調整を行った。

その他、パートナーシップ提携国であるドイツおよびオーストラリアを訪問し、FIBA ユーロバスケットの決勝ラウンド（ドイツ）および女子ワールドカップ 2022（オーストラリア）を視察し、2023 年以降の提携事業等について意見交換を行った。

10 月には FIBA タスクフォースによる視察が行われ、JBA の成長および安定が高く評価された。

オンラインが中心となっていた国際会議も対面開催されることが増え、2023 年 2 月以降は 2023 年 8 月に開催される FIBA 世界総会に向け、役員改選のロビー活動を展開。2023 年 5 月に開催された FIBA Asia 総会において、三屋会長が FIBA Asia 理事に選出された。

来期は FBWC2023 や国際強化試合も多くあり、FIBA 世界総会時の FIBA 役員改選等も控えているため、引き続き FIBA、アジアオフィス、他国協会と連携を図りながら活動を推進する。

Ⅲ 育成

1. 選手育成事業概況

コロナ禍の影響により、都道府県育成センターは都道府県の実情により回数を減少させながらもできる限り実施した。U14 ナショナル育成センター・ジュニアユースアカデミーは、トライアウトおよびキャンプ 2 回を実施し、実施内容を撮影・編集して指導者講習に役立てることとした。ユース育成部会では、ワーキンググループの活動が 2 年目を迎え、中間報告会を実施。また、ユース育成担当者会議を 2023 年 1 月、2023 年 6 月に実施し、2022-23 年度のユース育成事業について伝達を行った。

2. マンツーマン推進事業概況

2022 年 8 月に全中（全国中学校大会）ブロック大会でマンツーマンに関する講習会を実施し、同 8 月の全中大会、2023 年 1 月の全国 U15 選手権大会、同 3 月の全国ミニ大会にてマンツーマンコミッショナーの派遣・運営を行った。2022 年 8 月・12 月、2023 年 3 月にはマンツーマンディレクター会議をオンライン開催し、2023 年 4 月からの基準規則変更と周知の方法について協議した。

3. エリートコーチ養成事業概況

2022 年 12 月に U16-18 強化育成コーチ研修を対面にて実施、2023 年 6 月にはオンラインにて実施した。また、U18 指導方法論、U16 指導方法論、シューティングプロジェクト・ロバストシューティングについて JBA 公式ホームページにて情報公開し、内容の周知を図った。その他、2023 年 6 月に FIBA Euro よりマイケルシュワルツ氏を招聘し、エリートコーチ教育プログラム受講者の最終実技プログラムを修了した。

Ⅳ 指導者

1. 指導者養成事業概況

指導者養成事業については、事業の開催場所の確保等の課題はあったものの、先期まで少なからずあったコロナ禍の影響を受けることなく、ほぼ順調に事業を実施・遂行することができた。

(1) 講習会事業

講習会事業においては、2016 年から実施されていた暫定 S 級講習会に終止符を打ち、トライアウトによって受講生を選抜して行う正式 S 級講習会を実施することができた。また、2019 年度のコーチライセンス制度改定によって開始された E 級（e ラーニング）の更新時期を迎えるにあたり、e ラーニングの内容を大幅に改定、更にコロナ禍の影響で滞っていたキッズ関連事業がようやく軌道に乗り始め、キッズサポーター講習会を 1 回、キッズサポーターリーダークラス養成講習会を 3 回

実施すると共に、アルバルク東京とのコラボレーションによるエンジョイキッズイベントを開催するなどした。

その他、A 級・B 級講習会実施にあたり、都道府県からの受講推薦順位を男女別に付してもらうことによって、上位コーチライセンスにおける女性コーチ推進の試み、また、同講習会において、推薦によらない一般募集枠を設定し、受講機会を拡げる試み等にも取り組んだ。

(2) 研修会事業

研修会事業においては、「小学校体育・全学年対応 ゴール型ゲーム<バスケットボール>の授業プラン」の出版に伴い、著者が自らその内容を解説し、書籍内容をより多くの人に深く理解してもらうための出版記念イベントの実施、日本代表戦時にリフレッシュ研修会（「日本代表戦からの学びを現場に活かすコーチ研修」）を行い、日本代表戦の認知度を高めながらコーチとしての学びの場を提供する試み等に取り組んだ。

その他、コーチライセンス更新制度を刷新したことに伴い、ライセンス更新時に毎年次研修を課すこととした。2023 年度（2023 年 4 月～2024 年 3 月）の毎年次研修は、インテグリティの保護・強化に関する内容とし、福岡第一高等学校の井手口孝氏、富士通レッドウェーブの町田瑠唯氏のインタビュー映像を配信した。

(3) その他の事業

定期的にコーチライセンス保持者向けのメールニュースを配信することにより、登録コーチにとって有用なコンテンツを紹介するだけでなく、JBA 指導者養成の考え方を発信することに努めた。また、コーチライセンス更新制度を刷新し、毎年次研修を新設、新たなコーチライセンス別リフレッシュポイントの設定、コーチライセンス別研修の新設、コーチライセンス降級制度の新設等を行った。その他、47 都道府県協会の指導者養成委員長に対し、インタビューによる都道府県指導者養成事業の実態調査を行うなどした。来期は、その調査結果を受けて、都道府県協会指導者養成委員会および事業のサポート体制をどのように構築すべきかを検討していく。

V 競技・運営

1. 国内競技会概況

当期はコロナ禍の規制等の緩和に伴い、競技会の感染対策も徐々に緩和の方向に推移した。検討の際は、随時スポーツ医学委員会委員のドクターと協議して、柔軟な対応に努めた。

天皇杯では社会人チームや高校チームが B3 チームを破るアップセットが起きたり、皇后杯では大学チームがファイナルラウンドに出場する快進撃を見せたりと、トーナメント一発勝負ならではの展開となった。また天皇杯 3 次ラウンドの北海道会場において、天候不良（濃霧）による視界不良のため搭乗機が着陸できず東京に引き返し、千葉ジェッツの会場入りが遅れてしまうという事案が発生するも、試合開始時間を変更して何とか最後まで全試合を遂行することができた。

結果として、皇后杯は ENEOS サンフローズが 10 連覇を成し遂げ、天皇杯は前述の千葉ジェッツが満員の有明アリーナで琉球ゴールデンキングスを下して 4 大会ぶり 4 度目の優勝を飾り、盛況に幕を閉じた。

ウインターカップでは、前日の公式練習等新たな試みを実施した。また大会期間中の体調不良者発生時も医学的な見地に基つき適切な対応を施し、欠場チームを出すことなく大会を終えることが出来た。結果としては、男子は開志国際高等学校が悲願のウインターカップ初優勝を果たし、女子も京都精華学園高等学校が同じく初優勝を成し遂げ、男女共に初のチャンピオンチームが誕生した。

日清食品リーグについては、トップリーグが初開催、ブロックリーグは 4 ブロック（関東・東海・中国・四国）で開催し、成功裏に終わることができた。トーナメント大会とは異なる U18 世代の育成・強化の充実と、リーグ戦文化で生まれる日常的・量的変化により、競技力向上に寄与した大会となった。トップリーグは初めての開催とあり、いくつか課題も残ったが、来期以降に改善を図り、より良い大会になるよう努めていく。

ジュニアウインターカップについても、ウインターカップに続きコロナ禍による大きなトラブルはなく大会を実施することができ、男子はライジングゼファーフクオカ U15 が、女子は大阪薫英女学院中学校がそれぞれ初優勝を果たした。B リーグの下部組織が初めて大会を制することとなり、クラブチームの競技レベル向上が証明された大会となった。

全国ミニ大会についてもコロナ対策を講じつつの運営となったが、欠場チームが出ることなく無事に全試合を実施することができた。同大会は順位や優勝を争わない交歓の位置付けとなる大会でもあり、選手が他県の選手のプレーを体感したり交流することで、更に向上心が芽生え、楽しくプレーできるきっかけとなる良い機会を提供できているものと思料する。

2. 国際競技会（国内開催）概況

2022年8月に仙台・ゼビオアリーナにおいて、ソフトバンクが冠協賛となる男子日本代表国際強化試合（対イラン代表）、三井不動産が冠協賛となる女子日本代表国際強化試合（対ラトビア代表）を開催し、男女各 2 試合でいずれも日本が勝利を収めた。

その後同月に沖縄・沖縄アリーナにおいて、FIBA 公式試合である「FBWC2023 アジア地区予選 Window4」を開催。FIBA ランキング 68 位（2022/3/1 時点）のカザフスタン代表を相手に、男子日本代表（同 38 位）は危なげなく勝ち切ることができた。

2023 年 2 月には Window4 に次ぐ日本ホームとなる「FBWC2023 アジア地区予選 Window6」を群馬・高崎アリーナにて開催。FIBA ランキング 20 位（2022/11/18 時点）のイラン代表、84 位のバーレーン代表を相手に、男子日本代表（同 38 位）がしっかりと勝ち星を挙げ、その結果、日本はグループ 3 位でアジア地区予選を突破し、FBWC2023 への自力出場を勝ち取ることができた。なお高崎アリーナは、FIBA 主催大会では初めてのベニューであったため、FIBA から細かい施設適格要件の確認をされることとなった。

2023 年 6 月、三井不動産が冠協賛となり、女子日本代表国際強化試合を再び高崎アリーナで開催する運びとなった。マッチメイクに難航したが、FIBA ランキング 52 位（2023/2/28 時点）と 9 位の日本より下位のデンマーク代表をブックイングして 3 連戦を行った。結果は日本が 3 試合とも順当に勝ち星を重ねた。

2023 年 5 月に新型コロナウイルス感染症が「5 類感染症」に分類されたが、それ以前は政府の水際対策が講じられていた中で、対戦国の「特段の事情」による入国申請等、適宜関係省庁と密に連携してスムーズな入国措置を進めることができた。また、規制緩和後の女子日本代表国際強化試合においては、感染対策が実質解除された環境下で声出し応援も可能となり、熱量の高い応援が行われた。

3. 3x3 国内大会概況

先期に引き続き、今期もコロナ禍の影響を受け、感染対策を講じた上で各種大会を開催したが、当期は「JAPAN TOUR」「日本選手権」「U18 日本選手権」を、いずれも有観客で開催することができた。引き続き感染対策として参加全チームの関係者に対して体調管理の報告義務、試合会場での受付時の体調確認、会場内の消毒用アルコールの設置等を行い、安心安全な大会開催を心掛けた。また、大会周知のため、有観客での開催の他、YouTubeでの LIVE 配信を実施し、来場者のみならず、動画を通じて多くの方に試合を観戦して頂く機会の創出に努めた。

「JAPAN TOUR」は 4～11 月を 1 シーズンとして開催するため、当期は 2022 年シーズンの「JAPAN TOUR 2022」後半を 2022 年 7～11 月に開催。2023 年シーズンの「JAPAN TOUR 2023」前半を 2023 年 4～6 月に開催した。「JAPAN TOUR 2022」の開催にあたっては、「JAPAN TOUR FINAL」の冠協賛社としてサポート頂いている三井不動産所有の商業施設を積極的に活用し、FINAL は大阪・堺に新規オープンした「ららぽーと堺・スタジアムコート」を活用するなど、パートナー企業とのコラボレーションを実現した。また、1st term はツアーポイント 1 位チームに「FIBA 3x3 Challenger 2022」の出場権、ツアーファイナル優勝チームに「FIBA 3x3 Challenger 2023」の出場権を付与した。

「JAPAN TOUR 2023」は前シーズンに続き、2 年連続でオープニングを三井不動産所有の「コレド室町テラス大屋根広場」にて開催。コロナ禍も収束に向かいつつある中ではあったが、安全面を確保しつつ、直前までエントリー変更を認めるなど可能な限りチームが参加できる環境を維持し、大会期間中は関係者の体調不良等も発生せず実施することができた。

日本選手権は U18、OPEN 共に、試合会場を「大森ベルポート」に移し開催した。予選大会となる東中西の各エリア大会は、開催時期が 12～1 月と新型コロナウイルス感染症が拡大傾向を見せる時期と重なったため、十分に配慮しながら

の開催となった。U18 日本選手権はストリートで活躍する 3x3 の選手達に加え、各県トップレベルの 5 人制の選手も参加するなど、年々競技レベルの向上が見取れ、今後の 3x3 発展に期待できる大会となった。日本選手権は国内トップレベルの 3x3 チームが参加して観客を魅了。優勝した男子チームには「2023FIBA ワールドツアーマスターズ アジア・オセアニア大陸予選大会」への出場権を付与した。

普及事業としては、先期からの継続事業となる「U23/大学世代への普及活動」を実施。大学レベルの選手が参加するイベントを、前回の関東から全国に拡大して実施し、来期に向けた更なる拡大の足掛かりを作ることができた。

VI 審判

1. 審判事業概況

当期は、基本的な感染対策や体調管理を継続しながらもバスケットボール活動がコロナ禍前の状況に徐々に戻る中、審判、審判インストラクター登録者数が 2019 年度以来の増加に転じた。（2021 年度比各 3%、5%増）

また、リーグ戦の推進等による試合増や B リーグ、W リーグの将来構想や競技レベルの向上といった環境の変化に対応するため、2023 年 3 月に登録者アンケートによる実態調査を実施し、「JBS2021」に基づく JBA としての審判の中長期方針と施策を策定した。

具体的には、①各種大会を運営するのに十分な審判員、②登録審判員全体のレベルアップ、③誇りとやりがいのある審判活動、の 3 点を「作りたい未来」とし、①インストラクター改革、②割当て機会の改善、③トップレフェリーの強化、④技術情報の共有推進、の 4 点を作りたい未来を実現するための「方針」として定め、各方針に基づいてインストラクターライセンス制度の改革、S 級審判員の稼働過多解消、A・B 級審判員の活躍推進等の具体的な施策を定めた。今後は、全国の登録者に方向性を共有した上で施策を推進していく。

なお上述の登録者アンケートでは、約 7 割の回答者が「バスケットボールを支え、関わること」を審判活動のやりがいとして挙げた一方、約 4 割の回答者が審判活動に関する悩みとして「チーム、観客からのやじ、暴言」を挙げており、今後は審判員としての技術向上と並行して、判定を任される審判員の役割への理解促進、啓発をバスケットボールファミリーに対して継続的に働き掛けることが必要である。

VII 普及・啓発活動

1. 普及事業概況

キッズ関連事業として、キッズサポーター講習会を 1 回、キッズサポートリーダー養成講習会を 3 回実施すると共に、アルバルク東京とのコラボレーションによるエンジョイキッズイベントを開催した。また学校体育への取り組みとして、「小学校体育・全学年対応 ゴール型ゲーム〈バスケットボール〉の授業プラン」を出版し、出版記念イベントを実施して書籍内容をより多くの人に深く理解してもらうための試みを行った。（※再掲：前述「IV 指導者」記載）

その他、授業研究会を継続的に実施し、小学校の小学年・中学年・高学年に分け、ゴール型ゲーム（バスケットボール）についての研究・検討を行った。

2. 各種啓発活動概況

アンチ・ドーピング活動として、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）と連携し、主な国内競技会（B リーグ・W リーグ・天皇杯皇后杯）および国内で開催される国際大会におけるドーピング・コントロールを実施。男女各カテゴリーにおける日本代表強化合宿ではアンチ・ドーピング教育の時間を設け、強化選手・スタッフ向けの啓発活動も行った。

また、バスケットボール活動現場における暴力・暴言等行為の根絶に向けた活動として、インテグリティ委員会において方針を策定し、当期から都道府県協会等における予防・啓発の取り組みを開始した。具体的には、主に指導者や審判員等の都道府県協会等に所属するバスケットボールファミリーを対象に実施する研修会・講習会への講師斡旋や資料の提供等のサポートを行った。

今後も引き続き「バスケットボールファミリー安心安全保護宣言」に基づいた、より良いバスケットボール環境の構築を目指し、関係各所と連携・協力して事業を展開していく。

Ⅷ 出版物等販売事業

1. 出版物等販売事業概況

当期は競技会事業が予定どおり実施されたことにより、公式スコアシート、公式スコアブック等の販売売上が堅調に伸び、先期比で約 1.7 倍となった。

また、競技規則についても同様に先期より売り上げが伸び、出版物全体として 177%の収入増となった。

Ⅸ 認定および登録管理

1. コーチライセンス概況（2022 年度：2022 年 4 月～2023 年 3 月）

D 級は前年度比 1,039 人増（110%）、E 級は前年度比 6,996 人増（135%）と大きく伸び、全体では前年度比 7,540 人増の 78,492 人（111%）まで到達した。しかしながら、C 級は前年度比 165 人増（102%）の微増となっており、C 級の養成には課題が残っている。

＜コーチ登録数＞（単位：人）

S 級※	A 級※	B 級※	C 級	D 級	E-1 級	E-2 級	E 級	合計
155	289	1,195	11,490	11,620	11,768	14,897	27,078	78,492

※ S (F) 級、A (F) 級、B (F) 級コーチを含む

2. 審判ライセンス概況（2022 年度：2022 年 4 月～2023 年 3 月）

審判ライセンス取得者（登録数）は前年度比 1,303 人増（103%）の 48,071 人、審判インストラクターライセンス取得者（登録数）は前年度比 148 人増（105%）の 3,411 人となった。

【審判登録数】（単位：人）

S 級	A 級	B 級	C 級	D 級	E 級	合計
150	313	4,597	8,087	11,553	23,371	48,071

【審判インストラクター登録数】（単位：人）

T 級	1 級	2 級	3 級	合計
27	157	337	2,890	3,411

3. チーム、競技者（3x3 を含む）の登録概況（2022 年度：2022 年 4 月～2023 年 3 月）

全般的には前年度を上回る登録実績ではあるものの、コロナ禍前の登録数まではまだ回復できていない状況が続いている。

●チーム加盟数

	2022 年度	2021 年度	前年度比	
U12	8,350	8,375	99.7%	▲ 25
U15	13,115	12,879	101.8%	+236
U18	7,671	7,751	99.0%	▲ 80
一般	3,103	2,948	105.3%	+155
計	32,239	31,953	100.9%	+286

●競技者登録数

	2022 年度	2021 年度	前年度比	
U12	151,422	146,626	103.3%	+4,796
U15	222,970	222,581	100.2%	+389
U18	135,636	139,413	97.3%	▲ 3,777
一般	47,814	43,100	110.9%	+4,714
計	557,842	551,720	101.1%	+6,122

● 3x3 登録数

	2022 年度	2021 年度	前年度比	
3x3	1,802	1,556	115.8%	+246

4. エージェントの登録

エージェントの透明性確保を目的として、エージェント規則を改定し、日本国内において活動する（選手・コーチ等と B リーグ・B3 リーグ加盟クラブ間の契約締結を目的とした交渉等を行う）エージェントに対し、JBA 登録を必須化した。まずは国内におけるエージェント活動の現状把握と課題の洗い出しを行い、今後、必要に応じて対応を検討していく。

5. その他（2024 年度以降のチーム加盟・競技者登録制度について）

2018 年度の登録制度の再構築から 4 年が経過し、社会情勢や環境、スポーツの在り方や価値が変化している中、現状の課題解決とより良い環境作りのため、現行登録制度等の見直しを行った。見直しにあたっては、都道府県協会等関係団体とも意見交換しながら検討を進めた。

X 組織運営

1. 諸会議の開催、運営概況

当期の評議員会、理事会、専門委員会等各種委員会の会議運営においては、前半は先期同様に多くの会議が WEB 会議形式での開催を余儀なくされたが、後半はコロナ禍の行動制限緩和措置、緊急事態宣言の解除等の社会情勢の変化に伴い、徐々に対面またはハイブリッド（対面＋WEB）会議形式での開催が増加した。ただ、コロナ禍を経て、WEB 会議のメリットが認知され、運営ノウハウも培われたことから、状況に応じて開催方式を使い分け、コロナ禍前よりもむしろ活発に活動している会議体も見受けられ、各担当が柔軟に対応していることが窺えた。

特筆すべき事項としては、特別委員会として（時限的に）新たに「男子日本代表強化検討委員会」、「運動部活動地域移行検討委員会」が設置され、特定の課題に対処するべく精力的な活動が行われたこと、また、外部組織（法人）として設置されていた「FIBA バスケットボールワールドカップ 2023 日本組織委員会」を解散・清算し、新たに内部組織化（特別委員会化）して各部署との連携を強化、組織一体となった活動が展開されたことなどが挙げられる。

2. アンダーカテゴリー部会の運営概況

当期のアンダーカテゴリー部会の運営においては、先期からのコロナ禍の影響を受けつつも、with コロナの状況下で感染対策を講じながら活動を進めた 1 年となった。U12/U15/U18 各カテゴリーの会議体については、一部ハイブリッド会議形式で開催するも、大半が WEB 会議形式での開催となった中、諸課題の整理と対応策の検討を行い、都道府県協会 U12/U15/U18 各部長と連携を取りながら都道府県の実態把握に努め、課題への対応を促した。

U12 カテゴリー部会では、2022 年度の全国大会・ブロック大会の都道府県予選会に関する実態調査を実施し、各都道府県における実施状況・課題について洗い出しを行った。また、U12 世代における課題を整理し、「チーム運営基本指針（案）」を作成、バスケットボールを楽しむ競技環境を整えるための方策について検討した。

U15 カテゴリー部会では、2023年度からの中学校運動部活動地域移行に伴う対応について、U15ブロック別連絡会議を開催して各都道府県の実態と課題を整理し、今後の対応策を議論した。

U18 カテゴリー部会では、先期のU18 関東ブロックに続き、東海・中国・四国ブロックが新たにU18 日清食品ブロックリーグを立ち上げると共に、全国屈指の強豪チーム同士が対戦するU18 日清食品トップリーグを新設。また、U18 世代の競技環境と今後のU18 リーグ構想方針を整備するにあたり、各都道府県における実態把握を目的とした都道府県協会U18 カテゴリー部会の活動と競技会に関するアンケート調査を実施し、課題をまとめた。

3. コンプライアンス推進事業（裁定・規律委員会事業／暴力行為等通報窓口）の概況

裁定委員会・規律委員会では、主にJBAに登録する指導者・審判員による倫理規程違反の調査・事実認定を行って懲罰案を答申しているが、当期は暴力行為等通報窓口への通報件数増加に比例して、調査のための聴聞や委員会の開催回数、答申件数が大幅に増加した。

通報対応においては、被害者や通報者に寄り添った対応を心掛けると共に、裁定・規律委員会や都道府県協会・各種連盟とも連携し、迅速かつ適正な手続きによる懲罰や注意喚起等を行った。

今後も適正な手続きのもと、バスケットボール界における秩序維持・コンプライアンス向上を図り、具体的な再発防止策や規程整備等のガバナンス強化を推進していく。

4. D-fund 制度の運用概況

2022年度（2022年4月～2023年3月）のD-fund 制度運用にあたり、ファンド B においては、競技者登録数や1チームあたりの指導者・審判登録数をポイント化し、上限額を設定した。総内示額は2019年度総内示額と同額とし、2019年度総内示額からファンド B の金額を差し引いた金額をファンド A の内示額とした。事業毎の上限額設定をなくし区分毎の上限管理としたことから申請事業数を削減できたこともあり、概ね期限内の報告書提出が確認できた。

最終確定額については、コロナ禍に伴う事業中止や事業規模の縮小の影響もあったが、各都道府県協会（PBA）が受益者負担の原則に沿った講習会の実施等事業改善の努力が見られたことなどもあり、一部返金が生じることとなった。

また、競技者登録数が2019年度の競技者数を上回った場合に、その上回った分の登録料の比率を「JBA2：PBA1」から「JBA1：PBA2」へ変更することとしていたが、最終的な競技者登録数では4協会が2019年度の登録数を上回る結果となった。

なお2023年度は、2022年度同様に、ファンド B においてポイント制による上限額を定め、2019年度の総内示額からファンド B を差し引いた額をファンド A 内示額とした。また、2024年度以降は登録制度の一部改定に伴い、ファンド A における対象事業を大きく見直すこととした。

XI 広報

1. 広報活動概況

これまでBMK（B.MARKETING 株式会社。現在はBCP（バスケットボール・コーポレーション株式会社）に統合）に業務委託し、連携により対応してきたJBA 広報 PR 業務だが、当期途中に行われたJBA/BMK/BCP 間の総合的な機構改革の一環によってJBA 内に担当部署が戻ったことにより、各部門との内部的な連携がより緊密化され、各グループから上げられる情報や成果を広報する担当グループとして、今後のより積極的な活動への下地作りが整いつつある。

近年大きな制限要因であったコロナ禍も、当期において段階的に制限解除されたことに伴い、特に各種大会に関する各種ステークホルダーへの対応についても並行して拡充を図った。今後への課題は残るものの、スポンサー各社やメディアのご協力も頂きながら、前向きかつ柔軟な姿勢で露出の強化、コンテンツの充実、新規ファンの獲得等に取り組んだ。

対メディアに関しては、コロナ禍で控えていたメディアとの意見交換の場として4年ぶりにメディア懇親会を2回実施。70名を超えるメディア関係者からの忌憚のない意見を伺ったことで、今後に繋がる学びやひらめきを得るよい機会となった。地方

メディアに対してもU18 日清食品リーグ等をフックとして各地のメディア訪問等を実施、より広い範囲でのリレーションの構築・深化に努めたが、このようなアプローチは今後も継続していきたい。

来期はFBWC2023が、2024年にはパリオリンピックが控えており、5人制のみならず3人制も、またA代表のみならず各アンダーカテゴリー代表にもますます活躍の期待が高まっている。広報PRグループが担う業務・施策も更に多様化し、TV、新聞、雑誌等の主要メディアだけでなく、WEBやSNS等の発展・日常化により広報PRの可能性は飛躍的に広がり、その流れは今後も続いていくことが予測される。対外的・対内的に関わらず、時々潮流に乗りながら関係各所（JBA内、都道府県協会、Bリーグ、Wリーグ、スポンサー各社等）との連携をより深め、柔軟な発想で各種ステークホルダーの期待に応えるべく、ますます活発・幅広な展開を目指してバスケットボールの価値向上・認知度アップに繋げていきたい。

XII FIBA バスケットボール・ワールドカップ 2023

1. 大会運営準備概況

コロナ禍の影響により、オンラインミーティングを活用して定期的な大会運営に関する打合せを行う一方、2023年2月以降、FIBAの各担当者が来日し、沖縄アリーナでの打合せを複数回行った。本大会はFIBAの主催ということもあり、決定までの協議に時間を要する上、英語でのやり取りが中心となり、JBA主催大会とは違った対応が必要となる。安全・安心な大会の実現に向けて、今後は詳細を詰めていく。

2. 広報PR活動概況

2022年8月に沖縄県内において1年前イベントを実施し、本格的なPR活動を開始した。Bリーグが国内ローカルアンバサダーに就任したこともあり、クラブ主管試合、オールスターゲーム等でのPR活動を積極的に展開した。また、2023年4月29日にマニラで組み合わせ抽選会が開催され、沖縄への来場国が決定した。この模様を動画サイトにてライブ配信した他、TV・SNS等で情報発信を行うことで、幅広い広報活動を行うことができた。一方、全国のバスケットボール競技者向けとして、47都道府県協会の協力を得て、全国各地の大会においてPR活動を行った。

沖縄県内の認知度は日々高まってきたが、課題である全国認知度向上のため、今後はTV局と連動したPR施策を企画し、展開していく。

3. チケットセールス概況

チケットセールスは、2022年8月に2Dayパスを発売し、2023年5月に1Dayパスを発売した。PR活動を積極的に実施し、かつチケット販売戦略が成功したこともあり、販売は順調に推移した。

一方、FIBAの指定企業である米国のチケットソケット社のシステムが不安定で、チケットの発売・管理においてトラブルが発生し、LOC（FBWC2023日本組織委員会）としての対応に負担が大きく掛かることとなった。

4. その他（大会名誉総裁について）

2023年6月に、FBWC2023日本大会の名誉総裁に憲人親王妃久子殿下のご就任が決定し、大会期間中のお成りについて調整することとなった。

以上